

『佛大社会学』第二十号記念座談会

一九九四年十一月二十九日（火）

於・本学一号館2F第四会議室

出席者（敬称略）

浜岡政好（本学応用社会学科教授）

星 明（本学社会学科助教授、本学大学院社会学研究科
博士後期課程修了）

関谷龍子（本学応用社会学科非常勤講師、本学大学院社会学研究科博士後期課程修了）

今西康裕（本学大学院社会学研究科博士後期課程在籍）

司 会

近藤敏夫（本学社会学部社会学科専任講師）



《創刊期の思い出》

司会 まず、『佛大社会学』創刊期における機関誌としての性格と本学社会学科の当時の状況について、浜岡先生の方からご説明を願いたいと思います。

浜岡 私は一九七三年に本学に着任しましたが、当時はまだ社会学研究科のドクター・コースは出来ていませんでした。

〔佛大社会学〕の創刊の目的は、大学院や学部、通信教育も含めて研究教育体制全体の質の向上を図ることでした。だから第一号（一九七六年）には、高橋伸一先生（本学大学院



司会・近藤講師

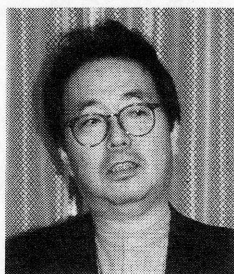
社会学研究科博士後期課程修了、現本学応用社会学科助教（授）の修士論文の素材になった日雇い労働者へのヒアリング（学部学生との共同研究）などが掲載されています。また、大学院を充実させるために、大学院生を含めた共同研究の推進を山岡栄市先生が提

唱され、「京都市民の意識調査」が実施されました。これには、大西正曹・加藤信孝・鳥越皓之の各先生と私が携わりました。この共同研究の経験が後になって研究所設立へとつながることになります。山岡先生は大学院教育を充実させるためにはぜひ研究所が必要だと考えられていました。（一九七十年代の終わりのことです。ところが学科に併設される形で社会学研究所が出来たために、教員側のエネルギーが研究所の方に傾注され、佛社研は大学院生主体の運営に変わっていったのです。

司会 それまでももう少し共同研究で具体的なものはなかったのでしょうか。

浜岡 大学院の潮見ゼミを中心に西陣のヒアリングが続けられていましたね。山岡先生のゼミでは滋賀県安土などの調査もやっていました。フィールド調査を通じて学部生と院生の関係もすっかりつながっていた。徳川真理子さんとか、木村・永井・西塚君たちは学部で調査研究をやっていて次々に大学院に進学してきた人たちです。また筆谷稔先生は院生に研究発表を義務化させ、学会や佛社研の場を活用されました。

浜岡教授



司会 三号（一九七八年）から七号（一九八二年）にかけて筆谷先生が書かれていますね。院生たちもしっかりとがんばった。院生と機関誌である『佛大社会学』の関係が深まった時期です。三号のころにドクター・コースが出来たのですね。

浜岡 そうです。院生の就職のことも考えねばならなくなりました。八号（一九八三年）には筆谷先生への追悼文が載っています。このあたりから運営の転換が見られるのではないかと思います。

《中期の状況》

司会 さて、第九号（一九八四年）から第十号（一九八五年）にかけて中期にさしかかるわけですね。

関谷 私は『佛大社会学』十号以降の時期に大学院に入りました。院生を引っ張っておられた筆谷先生が亡くなられて、研究会は若干ではあるが形骸化してきていました。実質的な運営は全て院生によって行いう形に転換してしまっていたので、院生にとってはやや負担になっていました。かつては連繋がとれていたという学部生との関係も、西陣調査を研究所が行う形になったので、学部生の活動の中心もそちらに移っていききました。私も、大学院に入るとすぐに西陣調査に携わっていました。

『佛大社会学』の論文は教員や院生が寄稿し、研究ノートとして優れた学部生の卒論を（指導教授に）推薦してもらい掲載していました。通信生の場合は別に発表の場がありました。機関誌発行の費用は、ほぼ全額が学科からの補助金でまかなわれました。十号前後くらいから個人の研究発表に内容がしぼられ、自主的ではあるものやや放任的傾向もみられ

るようになりました。

浜岡 この時期までの佛社研はかなり裾野の広がった研究会だったわけです。たとえば神戸大学の『社会学雑誌』のようなスタイルが、うちの初期に想定していた姿だったわけです。卒業生・在校生・教職員まであわせてやっていました。こういうイメーヅで進めていたわけです。ところがある時期から大学院の機関誌的なものとして『佛大社会学』が位置づけられるようになってきたのです。

司会 実質、研究会の母体が大学院になってきたのでそうならざるを得なかったわけですね。教員のかかわり方も形式的なものになってしまってます。

関谷 案内を各先生方に送り、マスター一回生のお披露目の発表などをやりました。

浜岡 十周年を転機にして、飛躍的な発展が見られましたね。若林良和先生（本学大学院社会学研究科博士後期課程修了、現松山東雲女子大学人文学部助教授）が通信教育を担当され、スクーリングの場を利用して佛社研のPRをされました。成

果があり、研究会への参加者や投稿される人もおられた。当時通信教育の受講者数は三十〜五十名程度でまとまりがよかった。教員と学生と一緒に登山したり、コンパしたりとか、かわりあいがあったのです。そういう雰囲気は佛社研に反映された。キャリアもある通信生とのいい関係が、研究会の裾野を広げる方向につながっていったのです。

関谷 大学院生の状況によっても随分変わってくる面はあると思います。一年に六人も入学した年があった。しかもユニークな人材が多かった。浜岡先生の「社会調査実習」の成果として、十三号（一九八八年）の竜王町、十五号（一九九〇年）の近江八幡市に関する院生の論文があげられます。やはり共同調査・研究は必要だろうと思います。



星助教授

《近況》

今西 今日では、われわれ院生の研究活動も個人研究が中心となり、先程来述べられているような、先生方と一緒に一つの研究テーマを追うということも少なくなりました。佛社研の活動に関しても、試行錯誤を繰り返しながら歩んでいるというのが正直なところです。現在の会員数は総勢で百名程度だと思っています。活動内容としては、定例研究会の開催、機関誌である『佛大社会学』の発行が中心ですが、多大学や各地の主要図書館に『佛大社会学』を配布し、情報交換にも努めています。また定例研究会に関しては、学内告知にも力を入れた結果、最近是他専攻院生の参加も見ることができ、院生間のヨコのつながりも芽生えつつあります。『佛大社会学』に関しては、今回（第二十号）のように投稿希望者が多い場合に表面化するのですが、その書物としての性格づけに若干のあいまいさが残っており、これをどのように克服するかが課題です。より具体的には学術誌としての側面と、会員相互の交流の場としての側面とのバランスの問題です。また、スクーリング時に入会を呼びかけ、せっかく入会された通信生の会員の方など日常的には交流が困難な学外の会員の方々と

の関係性をどのように維持・強化していくか、などの難問もあります。

司会 今後に向けて解決すべき課題も多いということですね。

今西 その一方で、院生室内では自主的な研究会も開かれており、先程も申しましたように、最近では佛社研の定例研究会においても他専攻院生、具体的には史学科の院生との交流をもつことができました。

関谷 これまでも、他学科の院生や学部生が研究会に参加してきたことはあります。

今西 さらに先程の補足にもなりますが、『佛大社会学』に関しては、発行費（現行二五万円）の枠もあり、そのなかで先の問題に折り合いをつけていかなければならないといった現実もあります。

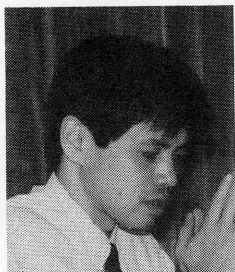
司会 われわれ佛教大学としては、神戸大学や、日本大学の『社会学評論』的なものをめざしていた。三号、七号は筆谷先生が中心だった。十号くらいから個人的なものが登場する。

十一号、十六号は、通信生の人達も加わり、個人的な研究が中心となる。そして、現在の二十号は寄稿が多いという悩みを抱えているわけですね。学術的機関誌としてどうするのかということも、今後の課題としてある。

《今後の方向》

浜岡 社会学研究所の設立によって、佛社研の機関誌の運営に影響が出たようですが、その社会学研究所は総合研究所に統合され、もう一度あらためて研究会の位置づけを考え直す時期にきているように思います。社会学の研究を目的とするのであれば、学部、学科とは別に自立していく必要もあるのではないかと思います。また、

研究会の停滞は院生のみの問題ではなく、学部教育、大学院教育、教員の問題など様々な要因が関係している。



関谷講師

星 学生の中に研究テーマや問題意識をもっている人が少ない。問題意識のある人を集

めて積極的に研究する場を設ける必要があるでしょう。一期は院生の予備軍がいたが、今は院生が定員に達しない状況です。実に厳しい。もちろん単位取得後の院生を取り巻く社会の事情も影響しているのではないかと。:

浜岡 『佛大社会学』においては、テーマを決めて依頼原稿にする方法もあるでしょう。読んでおもしろいものにしないでね。だれかが企画をたてて、内容的にも学術的機関誌にふさわしいものにしないでね。そのためにはエネルギーが必要でしょう。

司会 以前は機関誌への掲載後に発表会を行っていたようですね。皆が集まり研究討議をする。事後ではあるが、それでもそこから個々の判断基準が生み出されていく。

星 原則として発表してもらおう。寄稿だけに頼ると、社会学のカテゴリーに入らないものもあった。

司会 最後に今後に向けての明るい展望をどうぞ。

今西 また繰り返しになりますが、佛社研よりもよりミクロのレベルで院生の自主的な研究会もここ二三年活発化してきています。これを佛社研にもつなげるよう、まずわれわれ院生が主体的・積極的にやっていきたいと思っています。

星 売り込む努力も必要でしょう。また、研究と共に諸条件を整えることも考えねばならない。

浜岡 費用は社会学科からの予算ではなく、研究科の予算として独立させるのも一つの案でしょう。予算・人をきっちり独立させていく。学術振興課などと話をしてね。ソフトの面と制度的なものを高めていけばいいね。

今西 『佛大社会学』については、学部生の人達との連携も深めて、今回のような、何らかのテーマに関する座談会の記録を載せたり、エッセイ等も入れて親しみやすいものにするともに、学術論文については、事前に定例研究会



今西院生

で発表してもらった後、掲載する形にするなど、新たな方法も模索していかなければならないと考えています。

司会 短い時間ではありましたが、『佛大社会学』第二十号発行を前にして、その歴史の流れがかなり理解できたと思います。今日はみなさんどうもありがとうございました。